

住民主体での里地里山づくりとツ - リズム

グリーンツーリズムによる里地里山づくり / 長野県飯田市を事例として

糸長浩司

日本大学生物資源科学部教授

2003年度

(1) 飯田市のグリーンツーリズムの流れ

長野県の南部に位置する飯田市は、気候条件に恵まれ多様な農作物の南限あるいは北限に位置し、自然も豊かである。飯田という地名も“結いの田”に由来し、農山村コミュニティの象徴でもある共同労働作業の“ゆい”に深い関係を意識させる。飯田市では近年、行政と地域住民の連携で、都市農村交流を農業、農村の暮らし再見の見地から進めている。農山村と都市を結び、農山村を活性化させ持続型社会を構築するための都市農村交流事業を推進してきている。通過型観光ではなく、住民との交流を仲介する滞在体験型、学習型プログラムへの展開を進めている。また、同時に援農をテーマとしたワーキング・ホリデーの取り組みも盛んである。

これらの農的交流の仕掛けは、平成 10 年の農家民泊と農業体験を中心として千葉県の子供を受け入れた“体験修学旅行”を皮切りに、平成 13 年には 84 校、61 団体で 23,000 人が訪れている。これらのプログラムの多くは農家や地域社会が中心となって展開されているが、これらを補佐するものとして長野県南信州地域の 18 市町村から構成する(株)南信州観光公社や市の農政部局がある。

(2) 千代地区でのグリーンツーリズム活動

飯田市の最南端の山間地域である千代地区はグリーンツーリズムのメッカとなっている。地区の約 9 割を森林が占める。地区のグリーンツーリズム活動は、農山村資源や自然環境を利用した万古溪谷沢登りツアーや農業体験、農村暮らし体験学習テーマとした「あぐり大学院」である。特に、「あぐり大学院」は、地域の農林業、自然資源、農村文化資源や人材を活用し、人と人の触れ合いを大切にしたい、人作り、手づくりの学習ツーリズムである。

水田管理に関しては、棚田百選の「よこね田んぼ」での援農による棚田景観整備や、里山管理のための都市農村交流活動がある。地区住民の関心は、里山整備にあり、そのため、“森林カムバックお助け隊”が作られ、グリーンツーリズムの活動として位置づけられている。これからの里山整備は、昔ながらの真面目なスタイルだけではなく“楽しみ”の要素を備えなければ続かないとの意見が出て、千代の里山整備は“楽しみ”を基礎として進めている。その一方で、ツーリズムによる森林管理は、農業体験に比べて作物などの収穫を容易に得ることが出来ないため、リピーターが少ない等の課題も抱えている。



図 1 千代地区でのWSによるGT活動実態





写真 千代地区のグリーンツーリズム、
あぐり大学院の拠点の「ごんべ」

(3)座光寺地区でのワーキング・ホリデー

市の西部に位置し、比較的市街地に近い果樹栽培を中心とした都市近郊農村地域である。丘陵に果樹園が展開する地域である。果樹栽培での援農をテーマとしたツーリズムが展開されている。ワーキング・ホリデー(以下、WH)は、都市住民と繁忙期で人手不足や高齢により過重労働が出来ない農家を繋ぐ相互扶助制度で、金銭の授受など発生しない都市と農村の相互補完で援農ボランティアとして確立された。同市で展開される WH は都市住民が休暇を使い農家に滞在しながら農作業や伝統行事などを無報酬でサポートすることである。参加者の中から新規就農あるいは定住する動きも出てきているという。

地区農家の関心は、農業体験や援農による果樹栽培による農業振興である。現在の WH の利用者は、体験修学旅行として中高学生であり、収穫や出荷などの利益に直接関わる重要な作業を任せることが出来ず、受け入れ農家の負担となる場合も生じている。このことから、農業経験のある飯田市民の援農、身近な都市民の援農に期待する声も多く出てきている。また、果樹栽培の維持には都市農村交流による援農、水田の維持には第三セクターや法人化での対応策が地域でのワークショップではあげられた。里山と連たんする果樹園などは、有害鳥獣の被害を受けており、その対策の必要性が指摘されるが、里山自体への維持・管理に対する意識は低い。

(4)アンケートにみるグリーンツーリズムに対する住民意識

千代地区

2002年10月7日から17日にかけて実施した。この調査では、支所長を通じて全戸(670世帯)配布し、856部回収した。1世帯に3枚配布することで、各世代の意識調査を試みた。被験者の年齢層は、50歳以上が60.8%と過半数であり、40歳未満は22.8%と少なかった。GTの認知度としては、どの年齢でも万古溪谷沢登りツアー(75.7%)が最も知られていた。次に、農業体験(74.2%)が多く、五平餅作りと果樹・野菜の収穫体験も、どの年齢でも約半数の人達に知られている。GT活動への関わり方は、30歳代から70歳代の人達の20~30%が指導者や企画者としてGT活動に関わっている。大部分の人達が、お手伝いなどの運営関係者が参加者であることが分かった。このことから、GTは一部の人達により企画され、実施されていると考察できる。

地区全体への効果として、「よこね田んぼ」などの農業景観の保全・整備が進められる(78.3%)が非常に多く、次いで、都市部の人達との交流から地区の良い面が再発見できる(50.7%)であった。全体的に農業に関係する回答が多い。GTが地区住民の暮らしに与える影響が多かったのは、「今までの生活と何も変わらない」(59%)がどの年齢層でも半数以

上占めていた。特に、40歳代以下では、60%以上の回答率であったことが、若者の地域への帰属意識の低さが考察できる。地区にとってより必要なGT活動としては、休耕田の活用(44.5%)が多く、次いで、登山やハイキング(41.9%)であった。伝統的な産業体験や伝統工芸の体験学習は、農業や自然を活用したGT活動よりも回答が少なくなっていた。このことは、地区の大部分を占める里山資源をより活用していきたいという意識の現れか、田園景観保全に対する危機意識の現れかと思われる。地区に訪れて欲しい世代で多かったのは、若者(66.5%)であり、地区外の若者に期待する傾向にある。

座光寺地区

2002年11月28日から12月7日にかけて実施した。この調査は、農業従事者に直接配布(270世帯)を行い87部回収した。千代地区と同様に、1世帯に3枚配布したが、被験者の年齢層は、50歳以上が73.5%と大多数になり、40歳以下は25.1%であった。当該地区で認知度が高いGTは、農業体験(56.3%)と果樹・野菜の収穫体験(59%)である。これらのプログラムはWHと連携しているためよく知られていると考察できる。GTを知った理由として、どの世代でも多かったのは、広報・回覧板(58.1%)と新聞・広告(51.4%)であった。WHは、行政や(株)南信州観光公社などのPR活動を通して、広まっていると考えられる。

地区全体への効果として、都市部の人達との交流から地区の良い面が再発見できる(46.2%)が多く、次いで、農業後継者不足の解消(42.3%)が多かった。このことから、当該地区での農業後継者不足が深刻な問題となっており、WHに対する期待は大きいことが指摘できる。GTが地区住民の暮らしに与える影響で多かったのは、「人との繋がりが今まで以上に強くなった」(45.1%)である。次に、「今までの生活と何も変わらない」(39.2%)が続く結果となった。地区にとって、これから必要なGT活動としては、登山やハイキング(44.9%)が多い。里山管理活動に関する回答が多いことは注目できる。次いで、地元の名人から伝統工芸体験学習(42.9%)であった。地区に訪れて欲しい世代で多かったのは、中・高生(71.2%)であった。中・高生を中心に展開されているWHの影響のため、中・高生の割合が多い結果になったと考察できる。

GT活動に対する住民意識の比較

両地区での住民意識を比較する。地区全体への効果を比較すると、ほぼ同じであるが、千代地区は農業景観の保全・整備が目立ち、座光寺地区は後継者不足の解消が目立つ。この回答からは、今までのGT活動の成果が評価されているともいえる。GTが地区住民の暮らしに与える影響でも両地区は、ほぼ同じになったが、被験者が農業従事者のみである座光寺は、「人との繋がりが強くなった」が千代より多く、全戸配布した千代は、「今までの生活と変わらない」が座光寺より多くなる結果となった。このことは、アンケート被験者の違いによる差だと考えられる。地区にとってより必要なGT活動では、登山・ハイキングと休耕田の活用で千代が目立っており、座光寺地区では、伝統工芸体験学習が目立っていた。地区が抱えている課題をGT活動によって解決したいと思われる。訪れて欲しい世代を比較すると、若者向けのGTプログラムを多く有する千代地区では、若者が圧倒的に多く、座光寺地区ではWHの影響を受けて小学生、中・高生の割合が千代を少し上回る結果となった。

注)本報告は、日本大学糸長研究室での、糸長浩司、藤沢直樹、前野真吾、石橋輝一との共同研究による。

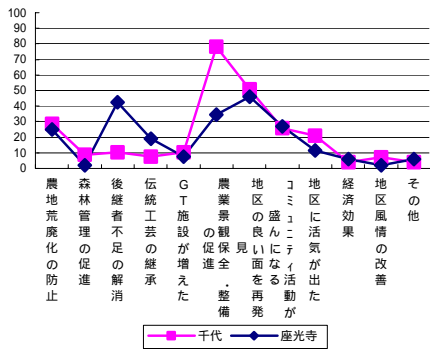


図1 GT が地区全体に及ぼす効果

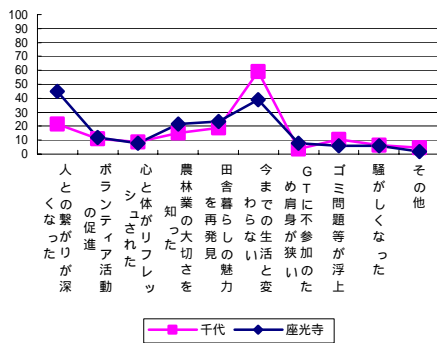


図2 GT があなたの生活に与える影響

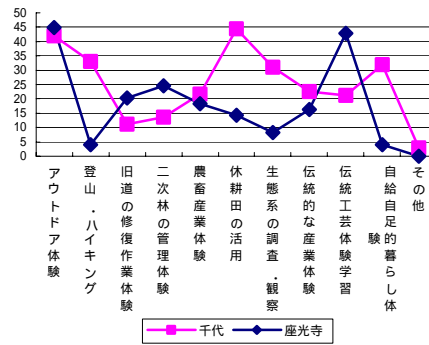


図3 より必要だと思うGT活動

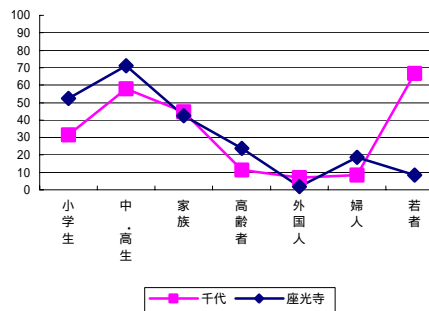


図4 訪れて欲しい世代